懲りもせず「無料化」を掲げるけれど（鈴木幸一氏の経営者ブログ）

2013/10/29 7:00 | 日本経済新聞　電子版

鈴木幸一（すずき・こういち）1946年9月生まれ。国内インターネットサービスの草分け。インターネットイニシアティブ（IIJ）を設立し、郵政省（現総務省）との激しいやりとりの末、93年にネット接続サービスを開始。後に続くネット企業に道をひらいた業界の重鎮。酒、たばこ、音楽と読書を愛し、毎春、東京・上野で音楽祭を開催、自宅は蔵書に埋もれる。

「一日に四季がある」。夏、ゴルフの全英オープンがスコットランドで開催されると、そんな使い古された表現をたびたびテレビで耳にするのだが、晩秋の気配が深まるエディンバラも、青空から透明な光が紅葉の樹木を照らしているかと思うと、気まぐれに吹く風向きの変化と同じで、あっという間に灰色の雲に覆われ、さぁっと雨が降り出す。雲間には光を残したまま、降り出している冷たい雨。いまだ、大きな樹木の葉が生い茂る北国の紅葉。この季節、冷気が覆い始め、寂しくて暗いのだが、なぜかホッとして安らぐのである。

エディンバラもダブリンも、この季節は運が良ければ、雲間から暗さを拭き取るような光が広がる景色で目を癒やすことができるのだが、暗く冷たい小雨に濡れ、黒ずんだ石造りの建築を目にしながら歩いていると、日本の軽く流れてしまう時間感覚とは違った大気が身体に染みてくるようで、別な時間を過ごせるような気がする。もちろん、スコットランドとアイルランドでは、その気候に始まって歴史、宗教、人々の気質も異なるわけで、一緒に語ることはできないのだが。アイルランドの通貨はユーロであり、スコットランドで手にする紙幣はスコットランド・ポンドと印刷されている。

　大地よ、名誉ある客を受け入れてください/ウィリアム・イェイツは永い眠りにつきました/詩をのみほされた/アイルランドの器をやすませてください

　暗闇の悪夢のなかで/ヨーロッパのすべての犬が吠えています/生きている諸国民はいずれも/憎悪のなかに引きこもって待ち構えています＜W・B・イェイツをしのんで　オーデン（中桐雅夫訳）＞

珍しく晴れた朝のカフェでゆったり新聞を読む老婦人（ダブリン）=筆者撮影

アイルランドの大詩人であるイェイツが死去したのは1939年である。サミュエル・ベケット、ジェームズ・ジョイス等々、悪夢のような20世紀に、新しい芸術を切り開いた代表的な芸術家たちを輩出したのは、虐げられた国、アイルランドである。

ケネディ大統領の祖先もアイルランドである。マンハッタンの古いバーも、そのほとんどはアイルランド移民が始めたものだ。夜、ダブリンの繁華街の居酒屋に行けば、そこにはギターをはじめ、さまざまな楽器を手にしては、演奏を続ける素人の巧みな音楽が溢れている。歌うこと、奏でること、アイルランドの居酒屋は、世界にも稀なにぎやかさで、ふと寂しさが襲う場所でもある。金融破綻から立ち直りかけてはいても、再開発地区の建造物は、工事半ばのまま、何年も放っておかれたままである。

財政危機以来、金融センターの再開発が中断したままの港湾エリア（アイルランド）=筆者撮影

わずかな時間の隙があれば、国内外の出張が続く。エディンバラ、ダブリン、ロンドン、ジュネーブを1週間で回った。冬に向かって駆け足のように暮れる欧州の晩秋は、黄ばんだ樹木の葉が美しい。夜半、ホテルに戻って、たばこを吸うと、インターネットという巨大な技術革新と長いこと付き合い続けている自らの生活が、他人ごとのように思えてくる。

エディンバラからロンドンに戻る。仕事の会食を終えて夜遅く、長く英国で暮らして情報・通信関係の仕事をしている同世代の友人がホテルに訪ねてくれる。バーで飲む。

「いつまで、いるの」「まあ、重宝がって使ってくれるからね。今更、東京に戻っても仕事もないだろうし」「○○君、今年の夏の暑さに持ちこたえることができず、亡くなったけれど、聞いている？」「うん、訃報だけは届くよ。ところで、日本の新聞を眺めていたら変な記事が出ていたけど、読んでいないでしょう。余計なことだろうけど、持ってきたよ。日本というのも面白い国だね」

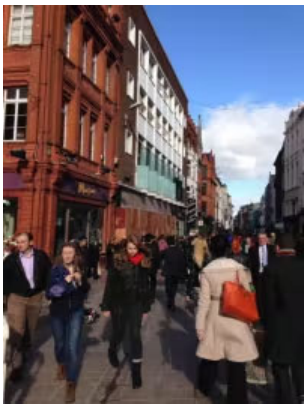
彼が持ってきた新聞の切り抜きを見る。

――私が提唱しているのは、ネットの高速通信を末端まで無料にしようということだ。ドイツは無料の高速道路網『アウトバーン』を張り巡らせることで自動車産業が栄えた。ネットはどんどん高速化が進む。日本はこれを世界に先駆けて末端まで無料開放し、さまざまな技術革新や起業を促して競争力を高めるべきだ。通信料でもうけるのではなく、サービスをつくって稼ぐべきだ――

北国の朝（エディンバラのホテルの窓から）=筆者撮影

本気なのか冗談なのか、耳目を引くためだけの発言に目くじらを立てるのもばかばかしい話なのだが、あえて記事にするということは、それなりの意味があると評価されての話かもしれない。それにしても、比喩が児戯に等しい話だし、インフラをすべて無料にすれば、新しい産業やサービス、技術革新が進むのだという要旨には、冗談にしてもいささかその域を超えている。ある種の人にとっては、物事がすべて単純に見えるのかもしれない。

アウトバーンは言うまでもなくナチスの一大事業であったけれど、話者は、きっと車の歴史はポルシェがすべてか、日頃、ポルシェをドライブするファンに違いない。まだ、ドイツが東西に分かれていた頃、アウトバーンがベルリンを起点にスター状に構築された道路網だけに、ベルリンを欠いた大戦後の西ドイツの産業にとって、その道路網について、再構成が議論されていたことを思い出したりする。それにしても、インターネットという情報通信基盤そのものが技術革新の焦点となっている時に、その技術革新の果実を無料にするという発想はどこから来るのだろう。現在のインターネットを運用する技術そのものを根本から変えて、本当の意味で、ソフトウエアの力によって、現在のネットワーク運用から一歩進め、ネットワーク技術の制約から自由にしようというSDN（ソフトウエア・デファイン・ネットワーク）という焦点となっている技術競争も、通信すべてが無料になるという話であれば、誰も、リターンのない投資に血道を上げることもなくなってしまう。


ダブリンの繁華街の賑わい=筆者撮影

電力、通信をはじめとするあらゆるインフラを無料にすれば、そのコスト効果で、企業の競争力が強くなるなどというつまらない話に付き合わされて、笑っていたのだが、それを書いてしまう私も大人げないというか、バカですねえとしか言いようがない。インフラ構築とその運用を無料化し、すべてを税で負担をすることは、二重、三重の意味でばかげた話である。

「変な記事、持ってきて悪かったかな。まともに怒るなんてまだ若いのだな。羨ましい。折角、久しぶりに飲んでいるのだから楽しい話でもしようよ」。まったく、まだまだ私にも、少しは血の気があるらしいけれど、恥ずかしいことこのうえない。飲み代稼ぎで始まったコンピューターとの付き合いも、数十年にもなると自分でも忘れていた思いが、どこかから浮かび出てしまうものらしい。ロンドンの静かなバーの飲み方ではない。

ジュネーブでフランスの人と仕事の話が終わって、オフィスの玄関まで送っていただいたのだが、その帰りがけに、「フランスの現政権はどう」と聞いたら、吐いて捨てるように「最低としか言いようがない」と、仕事中のミーティングでの静かな話しぶりが、嘘のような激しい口調で答えが返ってきた。当たり前のことだが、人間、そうそう静かなままではいられないようだ。

リンクスの朝=筆者撮影

フランクフルト経由で、成田に着いたのが午後3時すぎ。家に寄ってシャワーを浴び、休む間もなく、指揮者のリッカルド・ムーティさんのヴェルディについての講演を拝聴しに行く。楽譜とオペラのひとつひとつの言葉の隅々まで熟知したムーティさんの話は、眠気を飛ばすような面白さだった。講演を終えたムーティさんと、深更まで食事をしながら話し込む。IIJが主催をするムーティさんによるヴェルディの演奏会は、今週である。つまらないことに感情を波立てたり、深い学識と才能に触れて感動したり、忙中捨てたものではない貴重な時間を過ごせたりと、年を忘れた暮らし方について、自宅に戻り食卓に座るとふと思い返してしまうのである。

鈴木幸一IIJ会長のブログは毎週火曜日に掲載します。

鈴木幸一　IIJ会長のブログでは、読者の皆様からのご意見、ご感想を募集しております。
こちらの投稿フォームからご意見をお寄せください。

読者からのコメント

団塊の凡人さん、60歳代男性
鈴木氏の無料化反対と理由が異なるかもしれませんが、私も、安易に無料化を主張する人達の軽薄さには呆れます。通信インフラ無料化も、民主政権時代の高速道路無料化の主張と同じく、自己利益を優先し（民主は票の獲得、ネット販売業者は売上増）、無料化が実現した場合の社会的損失を考えないのです。ドイツの事情は知りませんが、日本での無料化は、維持と保守・新技術の開発等を国が税金で負担することになります。そうなった場合、日本の政治家は票獲得、役所は権限拡大と無責任体質ですから、まさに旧国鉄と同じ大失敗を繰返すと思います。インフラの安易な無料化は、税金の無駄遣いと取返しのつかない技術衰退をもたらす危険をしっかり認識すべきです。

主夫さん、60歳代男性
企業が利益の最大化を追求すれば、結果として生じる外部不経済は国、地方自治体の財政や他産業の企業活動を圧迫する。インターネット商取引に恩恵を受けているが、最近、札幌や神戸の中堅書店が廃業したり、家電量販店ですらネットに太刀打ちできなくなりつつあり、光と影を意識せざるを得ない。インターネットに係る産業の雇用吸収力はどれぐらいだろうか？米国が金融緩和を続けても、失業率の改善は足踏み状態であるし、ミダース王の「手に触るものを全て黄金に変える能力」の寓話を思い出させる。20年前に情報スーパーハイウエイ構想に携わったゴア氏の父は高速道路網を提唱した。インフラ構築は膨大な投資が必要であり初期段階では国の関与は妥当である。勝ち組とされる企業であっても「無料」を訴える論理は、「道路族」につながる政官財の癒着構造を想起させる。

小倉摯門さん、60歳代男性
優れた鈴木論にも偶には異を唱えるのも悪くないだろうと一筆言上。ビジネスにとって価格戦略は無論重要ですが、Pricingの基準はネット時代には変質が激しいと思う。従来の供給サイドに立つ「コスト+マージン」から需要サイドに立つ「ユーザーが認識する便益や価値観」に価格を設定する傾向は、ネットだけではなくアナログ・ビジネスでも増えて来ると思う。この基準は、例えば供給側の認識を、（1）利益重視から顧客満足へ　（2）製品から商品へ変革を促すだろうと。また、以前から不動産業界でも、土地では多少の損を出しても建物や家具に高い意匠を施して全体で利益を挙げるモデルはある如く。閑話休題、【人間、そうそう静かなままではいられない】には皮肉笑い致しました。地上では霞が関文学を綺麗に嘯き地中では仲間と謀り静かに悪さをする「悪賢いモグラ」や、迫り来る危機にも重い責務に目覚める訳でもなく静かなままの「茹で蛙」を想い出したのです。

ビジネスリーダー トップに戻る　ビジネスリーダー Menu一覧　経営者ブログ トップ

本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は、日本経済新聞社またはその情報提供者に帰属します。また、本サービスに掲載の記事・写真等の無断複製・転載を禁じます。

Nikkei Inc. No reproduction without permission.